

霜夜 芥川龍之介

霜夜の記憶の一つ。

いつものやうに机に向つてゐると、いつか十二時を打つ音がする。十二時には必ず寝ることにしてゐる。今夜もまづ本を閉ぢ、それからあした坐り次第、直に仕事にかかれるやうに机の上を片づける。片づけると云つても大したことはない。原稿用紙と入用の書物とを一まとめに重ねるばかりである。最後に火鉢の火の始末をする。はんねらの瓶に鉄瓶の湯をつぎ、その中へ火を一つづつ入れる。火は見る見る黒くなる。炭の鳴る音も盛んにする。水蒸気もやもや立ち昇る。何か楽しい心もちがする。何か又はかない心もちもする。床は次の間にとつてある。次の間も書齋も二階である。寝る前には必ず下へおり、のびのびと一人小便をする。今夜もそつと二階を下りる。家族の眼をさませないやうに、出来るだけそつと二階を下りる。座敷の次の間に電燈がついてゐる。まだ誰か起きてゐるなと思ふ。誰が起きてゐるのかしらとも思ふ。その部屋の外を通りかかると、六十八になる伯母が一人、古い綿をのばしてゐる。かすかに光る絹の綿である。「伯母さん」と云ふ。「まだ起きてゐたの?」と云ふ。「ああ、今これだけしてしまはうと思つて。お前ももう寝るのだらう?」と云ふ。後架の電燈はどうしてもつかない。やむを得ず暗いまま小便をする。後架の窓の外には竹が生えてゐる。風のある晩は葉のすれる音がする。今夜は音も何も

しない。唯寒い夜に封じられてゐる。

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

◆ 出典 『芥川龍之介全集 第十卷』(岩波書店、一九九六年)

冬の庭 室生犀星

冬になると庭を眺める時がすくない。霜で荒れた土の上に箒をあてるといふわけにゆかないから、秋晚くに手入れを充分にして置かなければならない。この手入れさへ怠らなかつたら冬ぢゆうそのままにして置いてもいい。木の葉なども綺麗に掃き取っておけば、乱れるといふことはない。冬の庭の味ひの深いのは何といても霜で荒れた土がむくみ出し、それが下ほど凍えて、上の方が灰のやうに乾いてゐる工合である。苔は苔のままむくみ上つてゐるところに、何とも言へぬ深い寂しみが蔵しまはれてゐて、踏んで見るとぎつくりと土が沈む。乾いた灰ばんだ何処か蒼みのある土が耐らなく寂しい。掘り出しものの朝鮮の焼きもののやうな色と粉とから成り立つてゐるからである。

冬は庭木の根元を見ると、静かな気もちを感じさせる。灰ばんだ土へしつかりと埋め込まれて森乎しんとしながら、死んでゐるやうな穏かさをもつてゐるからである。庭を愛するひとびとよ、枝や葉を見ないで根元が土から三四寸離れたところを見たまへ。さういふ庭木の見かたもあることを心づいたら、わたくしの言ふことはないのである。

冬は四季を通じての庭のはらわたを見せるときである、庭の持主の心づかひが此の季節にすつかり表はれ、春夏秋の手入れや心配りの程が解るやうである。春夏秋の怠りもまた冬になると露あられれるのである。池水がよご

れて居れば水が美しく見えない。木の掃除が行きとどいてゐなければ枯葉を乱すおそれがある。

何と言つても冬の庭は厳格と品とをもたなければならぬ。どれだけ厳格であつてもよい、むしろ厳格すぎて優しいところができれば、冬の庭としての全幅を含んでゐるやうである。冬の庭は障子硝子ガラスから一と目眺めたきり、それ以上眺めることがすくないものであるから、その瞬間に何かが視覚を打たなければならぬ。冬は寒いから庭のありさまも温かくしなればならぬといふのは俗説である。どこまでも深く鋭い方がよい。徒らな松の吊縄、藁のかけ法師、植木の巻藁まきわらなどはよくよく考へてから、その位置を作らなければならぬ。烏瓜の実の朱い色が凍み亘りその色が黒ずんでゆく、しまひに吊柿のやうな色になり干乾ひからびて種が鳴るやうになる。そこで初めて烏瓜の美しさが感じられるやうに、冬の庭も四季の終りに豁然として美事な眺めに就かなければならぬのである。

◆ 出典『花の名随筆12 十二月の花』（作品社、一九九九年）

水雪の障子 島崎藤村

めずらしいものが降った。旧冬十一月からことしの正月末へかけて、こんな冬季の乾燥が続きに続いたら、今に飲料水にも事欠くであろうと言われ、雨一滴来ない庭の土は灰の塊のごとく、草木もほとほと枯れ死ぬかと思われた後だけに、この雪はめずらしい。長く待ち受けたものが漸くのこと町を埋めに来て呉れたという気もする。この雪が来た晩の静かき、戸の外はひっそりとして音一つしなかった。あれは降り積もるものに潜む静かきで、ただの静かきでもなかった。いきぐるしいほど乾き切ったこの町中へ生気をそそぎ入れるような静かきであった。

にわかには北の障子も明るい。雪が来て部屋々々の隅にある暗さを追い出したかのよう。こんなものが降ったというだけでも、何がなしにうれいところを見ると、いくつになってもわたしはまた雪の子供だと見える。麻布飯倉に住んだ頃は界限が岡の地勢であったから、あの辺の町中にはかなり勾配の急な傾斜があった。山国に生れたわたしは、雪が来ると自分の幼い日のことを思い出し、谷底にあったような古い住居を出ては、よくあの植木坂へ氷滑りに走り出た。

降ったばかりの雪は冷たいようで、実は暖かい。それを踏めば歓びが湧く。

わたしの郷里はそれほど雪の深い山里でもないのだが、それでも家の前の古い街道は毎年のように白い雪道に変わったものだ。革のむなび、麻の蠅はらい、紋のついた腹掛から、鬘、尻尾まで雪に濡れながら荷馬の往来したのも、あの道だ。古いわたしの家に生れたものは、祖父も、父も、みな往時旅人の送り迎えに従事した人達であったから、雪が来るたびにわたしはいろいろなことを思い出す。そしてあの山間の雪道を踏んで働いた遠い祖先の方にまで心をさそわれる。

雪の中にはいろいろなものが隠れている。ちょっと思い出して見たばかりでも、幻のように立つ像は数え切れないほどある。あるものは血をもって雪を染め、あるものは深い雪の中に坐りつくした。

雪中の動きこそ、昔の人達がいろいろなさまさまな形でわたしたちに教えて見せて呉れた生命表現のおもしろきではある。あの不死の鳥のような鷺娘の濃情が古い舞踊の一つとして今日まで残り伝えられているというのも、雪中の動きからだ。眼に入る冬の牡丹花に千鳥の啼き声をききつけ、寒苦の思いを雪のほととぎすにまで持つて行った古人の想像は、やはりこの消息を語っている。

亡き川越の老母がまだ娘ごかりの頃、松雪庵という茶の師匠の内弟子として、あるところへ茶を立てに行つたという雪の夜の話はわたしの家に残っている。この師匠の前身は十年も諸国行脚の旅に送つた尼僧であつたそうだが、茶人として松雪庵を継いでからも、生涯つましく暮して居られた婦人のように、雪の夜にも炬の火の絶えない知人の許へ茶を立てに行くことを年若な弟子に命じたものであつたという。髪を銀杏返しか何かに結び、昔風の質素な風俗で、白い綿のようなやつがしきりに降つて来る中を急いで行つた時の人は、おそらく熱い風雅の思いに足袋の濡れるのを忘れたであろう。まだ若いさかりの娘の足は、おそらく踏んで行く夜の雪のために燃えたであろう。

応くと言へど叩くや雪の門

まさに、この境地だ。過去にはこんな人達もあつた。

◆ 出典 『エッセイの贈りもの 1』 (岩波書店、一九九九年)